

全体及び森林技術部門（全般）

山形大学教授 芦谷 竜矢

【全体講評】

発表者の皆様、本当にありがとうございました。素晴らしい発表だったと思います。今回計 36 件の発表がありました。森林の機能と同じく本当に多様な発表で、現場の環境保全、資源利用、植物・動物・微生物の生態調査とその応用、あるいは教育も含めた人間活動、それから材料や食糧生産、学問分野で言えば基礎から応用科学までの学問分野を含む内容の発表でした。人間生活の面では防災から産業振興に至るまで本当に幅広い分野を担っている、森林・林業ということを実感させる発表会であったと思います。その森林・林業を第一線で担っている皆様方には本当に敬意を表したいと思います。

私もこの発表会に何年か参加し続けていますが、年々発表者の技術がどんどん向上していることを実感しております。特に若い方の発表は、小学校の時からパワーポイントを使っている世代とのことで、我々の時代と全然違う、わかりやすい内容であったと思います。

一方、大学等の発表を除いて、業務の中でやられたものではコントロールの設定など研究として完全でないものもありました。しかし、本会は学会ではなく交流会です。ケーススタディも含めて発表をしていただいて交流をするのが一番大事だと思います。そのような発表こそ貴重であり、大いに発表していただき、問題点を共有し、交流を深め、次の業務や技術開発に資していただくことに意味があると思います。

また、一昨年も申し上げたことですが各署で似通った内容の発表が結構ありました。これは似た発表するなということではありません。この発表会を通じて発表会が終わった後、同様な発表をされた方同士で情報を交換して次年度、再来年度より良いものとして発表してください。あるいは共同でより発展した内容を発表していただくことと本会の趣旨を踏まえたより良いものになると思います。

さらに、大学の発表では論文化が十分できる内容もあったと思います。他にも県の発表や各署の発表では、なかなか時間が取れないかもしれませんが、もう少しやれば学会発表や論文となる発表も見受けられました。ぜひ継続して内容を深め、学会や論文誌等にも内容を発表していただき、広く一般、あるいは研究者の方に情報を公開してください。

最後に発表者の皆様ありがとうございました。また、この場を用意していただきました東北森林管理局の皆様にもお礼を申し上げまして私の講評といたします。

【森林技術部門全般】

技術部門は15件の発表がありました。

特に今年はUAV、ICT、AI、インターネットといったものを活用した内容の発表が多い印象でした。無論、コンテナ苗の植栽試験や下刈りの新たな方法の試みなど、現場に即した地道な調査の発表も行われました。

身近なスマートフォンやデジタル、インターネット技術、こういったものを応用した発表では、若手の発想というのが生きた発表であったということと、またそれを拾い上げて発表できるまで内容を練り上げられた皆様には敬意を表したいと思います。人員確保が難しい人口減少社会の中で効率的に森林管理を行う目的の発表が多く見受けられました。しかし、技術革新の速度がどんどん早くなっていく中、新たな機器やシステムに即応することは容易なことではありません。幅広い年齢層や多様な専門分野を持つ人員構成で対応することが重要であると思います。どの発表も各署のみで留めておく技術ではなく広く応用可能な内容でした。なかなか人材確保が厳しいと思われませんが、本交流会などを通じて情報共有を進めていただき、今回発表された内容を現場に広く浸透させ、実際に応用していただきたく思います。

審査の段階では、どの発表も点数が僅差であり、審査委員一同大いに悩みました。賞を逃した発表であっても低い点数ではなかったことをここに記しておき、森林技術部門の講評といたします。

森林技術部門（個別）

山形大学教授 芦谷 竜矢

1 カラマツ挿し木コンテナ苗による植栽試験

継続した調査の発表内容で、東北地方に挿し木コンテナ苗の適用を試みる内容である。実生苗と比較したコンテナ苗の成長の優位性、下刈りの省略の可能性や系統ごとの成長量の差異など有益なデータが得られている。特に東北地方の場合は雪害が大きな問題であるため積雪深との関係など継続して調査していただきたい。

2 ドローンによる新たな造林地管理手法の提案～高精度 GNSS と AI の活用～

UAV による画像取得と AI を用いた最新の解析技術の管理手法の開発であり、今後のスタンダードとなりうる発表内容で、審査員の中で高く評価された。AI の使用は待ったなしの状況で、現場に浸透していくと思われるが、機器やソフトの更新にかかるコストの問題や、使用者の理解度の向上が鍵となる。さらに研鑽を積まれ今後より効率的な管理技術の開発に努めていただきたい。

3 ドローンを使用した下刈りの要否判定について

UAV を用いた下刈り省力化の試みであり、効果的な使用によって業務の効率化が達成できることを示されている。また、誤差の要因についても考察されており、今後につながる成果と言える。機器やソフトの性能に依存する内容でもあるため、それらの更新によって解決する点も多いと思われる。機器等の更新に関わるコストなども踏まえて調査を継続していただきたい。

4 海岸防災林における松くい虫被害調査の省力化に向けて～ドローンを活用した調査方法の検討～

マツノザイセンチュウ病の被害の把握は大変重要な課題であり、広範囲かつ判定が難しく問題となっている。UAV を用いて簡便に被害を把握しようとする調査課題であり、現場の作業員の声も得られており、意義深い発表内容であった。近年の UAV では近赤外スペクトルなどの測定を行えるものもあるためそれらの活用も考えてはどうか。また発表番号 14 の山形県の発表者とも連携して共同して取り組めばより良いものとなると思われる。

5 仙台海岸防災林におけるアカマツ植栽地の生育状況について

マツノザイセンチュウ病に比較的抵抗性が高いアカマツが海岸防災林にどこまで適用可能かを探る研究である。抵抗性クロマツ苗木が不足し、同病が猛威を振るっている現状で重要な発表内容といえる。今後も調査を継続して成長量や飛砂防止効果についてデータを蓄積していただきたい。

6 スギ造林地の下刈における「点状てっぺん刈」の実験報告

再造林費用のうち大きな割合を占める下刈りの省力化に向け、手鎌で梢端部のみを刈り取る方法を検討した内容で、急傾斜地等では有効であるという結果を示した発表内容であった。特に東北地方では刈払機が入りづらい複雑な地形や急傾斜地が多く、現場の状況を踏まえた内容で地道な取り組みといえる。今後もさまざまな状況に応じて対応できる技術の開発と検証を行っていただきたい。

7 署内の仕事、見える化してみた！

人員が減る中で人事異動を伴う職場の業務の引き継ぎは、国有林だけでなく我が国全体の大きな問題となっている。特に広い面積を管理し、一步間違えると大事故にもつながりかねない国有林の業務では喫緊の問題となっていることが伺えた。その解決のために GIS を用いて業務内容を可視化する取り組みは、森林管理ならではであり、柔軟な発想であると高く評価できる。これが一署のみで終わればせっかくの取り組みも活かせるなくなるため、同様のシステムが全署で行えるように普及することが課題となるであろう。工夫を重ね、本システムを広く普及していただきたい。

8 林道調査はスマートフォンとともに～手のひらサイズで現地がわかる！～

身近に使用しているスマートフォンがどこまで測量に応用可能かを探る発表内容であった。スマートフォンの機能の進化は著しく、特に若者では普段から使用に慣れているため、経験の浅い現場職員が扱いやすいメリットが大きいと思われた。簡便なマニュアルが作成できれば広く普及する技術となると予想され、高く評価された。限界点を見極めつつ手法の確立を行っていただきたい。

9 ICT を活用した林道改良工事についての一考察

ICT を用いた林道改良工事の事例が紹介され、メリットとデメリットについて考察した発表であった。今後 ICT を活用することが当たり前になると思われるが、過渡期にあたる現時点での問題点や対応法について丁寧な考察がされている。特に実際に作業にあたる受注者側のアンケート結果は貴重である。今後は現場作業員も ICT に慣れた方が多くなると思われるので取り組みは継続してほしい。

10 山腹崩壊地における土壌藻類を活用した表面浸食防止工法(BSC 工法)の UAV 施工について

土壌藻類を表面侵食防止に使用する新規工法とその施工に UAV を用いた事例が説明された。安全性の面からも UAV の使用は有効であり、省力化も達成されることから期待できる方法であることが発表を通じて伝わった。広く普及するようにマニュアルの整備や見学会など取り組みを進めていただきたい。

11 治山ダム施工地の堆砂敷における植生と土砂動態の把握について

治山ダム施工後の植生変化等を航空写真等から調査した内容で、動態変化の経時変化がよくわかる発表内容であった。河畔環境は動植物の生態に大きく影響するため、このよう

な調査結果は大変貴重である。今回一箇所の結果であるが、今後調査地を増やしてさらにデータを蓄積していただければ、学術的価値も大きい内容となると期待される。

12 林地残材の有効利用と造林コスト削減の取組

林地残材の利用は長年の課題であるが、実際に造林コストの削減につながるデータが示された。集積と運搬コストがネックとなろうが、条件整備を進めることで解決されていくことを期待する。また、林地残材を受け入れる発電施設が近くにあることも条件の一つであるので、その整備も必要である。さらに将来的には燃料以外の利用法についても検討すればより有効な利用ができるので、情報収集を行なっていただきたい。

13 スマートフォンによる衛星通信緊急連絡検証

身近なスマートフォンが衛星通信を用いて林野内で使用できるところに着目した画期的な発表内容で、職員の方の負担軽減とコスト減を達成しようとする試みが高く評価された。必ずメールをチェックできる体制づくりや、使用にあつたてのルールづくりなどの課題もあろうが、従来の衛星携帯電話より使い勝手も良く簡便であるため広く普及することが期待される発表であった。

14 林道パノラマビューによる路線情報の拡充とその活用

インターネットの地図情報に慣れ親しんだ現代的な発想であり、正確に実現できれば画期的な成果になることを期待させる発表内容であった。現時点では撮影インターバルの問題等、発表で指摘された課題もあるが、今後機器の発展とともに解消されていくものと思われる。デジタルデータで記録されたものはさまざまな応用ができるので、今後継続して改良に取り組んでいただきたい。

15 無人航空機(ドローン)による苗木運搬の取組について

UAV を用いた苗木輸送を実際に行った 3 件の事例が紹介された。3 事例とも UAV の使用は有効であり、事業者のアンケート結果も良好なようで、UAV 使用に適した条件が見出された。今後広く用いられる方法であると思われ、機器の性能が上がればより有効性も増すことが期待される。事例を多く重ねてより作業効率が向上するよう工夫していただきたい。

森林保全部門（全般）

弘前大学教授 石田 清

まずは技術交流発表会に参加いただき大変お疲れ様でした。どの発表もわかりやすく、楽しく発表を拝聴しました。森林保全部門については、野生動物の被害に関わる課題が3件、マツ枯れに関わる課題が2件、白神山地の動植物の保全に関わる課題が2件ありました。ニホンジカの食害や松くい虫被害の対策に関わる課題は、各地域で長年取り組んでこられたものであり、今回の発表は作業効率の向上や省力化につながることで期待される重要なものであったと思います。さらに、食害昆虫に着目した松くい虫被害の調査手法の開発や、植物と動物の相互作用に基づいた研究など独創的な着想に基づいた取組も大変興味深いものでした。林業技術の革新には新たなテクノロジーの利用が有効ですが、現場で得られた洞察や、関連学問分野の新知見も同様に重要であることを示していただいたといえます。森林や樹木に関わる現象は、長期の調査によって実態が見えてくるものが多いです。そうした現象に関わる課題は組織が主体となって続けていく必要がありますが、そうした課題の遂行においても、各担当者ご自身の着想を活かすことによって問題解決やより良い技術の開発に繋げていただければと思います。

森林保全部門（個別）

弘前大学教授 石田 清

16 人工林は天然生林に劣るのか？－白神山地の動物相に着目して－

本発表は、センサーカメラを用いた調査によって人工林におけるニホンカモシカなどの有蹄類の生息状況を示したものである。天然林との比較により、人工林が生物多様性の保全に寄与していることを明示した点を評価したい。有蹄類の行動範囲を考慮した広域・長期にわたるさらなる調査が望まれる。生物多様性の保全を考慮した森林施業技術の確立は重要な課題である。今後の取り組みに期待したい。

17 白神山地周辺地域自然再生計画箇所の天然更新状況調査

本発表は、広葉樹林化を図るために列状間伐されたスギ人工林での広葉樹侵入の状況を示したものである。前生稚樹の有無や日照条件が列状間伐箇所の広葉樹更新に影響していることを示唆するデータが得られている。保護樹林内の広葉樹各種の母樹からの距離が天然更新にどのような影響を及ぼすのかについて、さらなる調査と検討が望まれる。

18 三陸中部森林管理署の造林地におけるニホンジカ被害対策について

三陸中部森林管理署で実施されてきたいくつかのニホンジカ被害対策について植栽木の生育状況や被害状況を調べ、各対策の特徴や課題をまとめた発表である。忌避剤散布や単木保護資材、カラマツの植栽がシカ対策として有効であることを長期間のデータに基づいて示した点を評価したい。シカ対策を重視した森林整備・施業指針の確立に向けて、各対策の評価を踏まえた包括的な取り組みを継続してもらいたい。

19 森林施業に配慮した効率的な「クマ剥ぎ被害対策」

本発表は、クマ剥ぎ被害対策として考案された剥皮被害防止テープについて、被害対策研修会を開催して当該技術の普及を図る取り組みや、従来の方法に改良を加えた新たな方法について検討した結果を報告したものである。テープをはちまき状に巻く方法が被害対策作業の効率化に寄与することを示した点を高く評価したい。現場で得られた着想を活かし、剥皮被害防止技術の確立とその普及に向けた調査・取り組みを継続してもらいたい。

20 ドローンを活用した松くい虫被害の概況調査について

本発表は、松くい虫被害調査の省力化を図るためにドローンを活用した被害概況調査を行い、当該手法の利点と問題点を示したものである。海岸クロマツ林での取り組みを通して、ドローンの活用が被害概況調査の省力化に寄与することを明示した点が評価される。その一方で、被害量推定の精度向上は重要な課題といえる。ドローンをを用いた被害調査手法の確立に向けて取り組みを継続してもらいたい。

21 抵抗性クロマツ林の成立にともなう加害昆虫の変化（予備調査編）

本発表は、松くい虫被害の早期発見に関わる新たな調査手法についての試みを紹介したものである。マツ林に設置したライトトラップによってマツ類を加害する甲虫類数種の個体数をモニタリングし、その結果から小規模な被害や被害増減の傾向を検出するという着想は新規性がある。本手法は松くい虫被害の早期発見・拡大予防に関わる技術に革新をもたらす可能性があることから、高く評価したい。当該調査は予備段階であり、マツノマダラカミキリはまだ確認されていないが、今後の長期的な取り組みとその成果に期待したい。

22 秋田県海岸林における広葉樹植栽木への食害に周囲の樹木の種類と密度が与える影響

本発表は、ノウサギによる広葉樹植栽木の食害について、連合効果、すなわち食害の程度が周囲の植物の存在によって変化するという現象が見られることを植栽実験によって示したものである。草食動物の採餌行動に見られる連合効果を植栽木の食害対策に応用するというアイデアは生態学に関わる分野で注目されているが、実証的な研究事例は少ない。連合効果に基づいた食害対策は今後の発展が期待される手法であり、高く評価したい。連合効果についての基礎的研究とその成果の応用を目指した取り組みを継続してもらいたい。

森林ふれあい・地域連携部門及び中学・高等学校の部（全般）

東北森林管理局森林整備部長 牛尾 光

まずは二日間にわたり大変お疲れ様でした。昨年も審査させていただきましたが、今年は発表課題が増えたということで、審査は難しくなりましたが大変うれしく思います。

日頃の業務や学業の中で忙しいことと思いますが、問題意識をもって解決に向けて貴重な時間を割いていただいたことに深く感謝申し上げます。

【森林ふれあい・地域連携部門全般】

森林ふれあい・地域連携部門については、全体で 11 課題の発表がありました。私なりに大きく分類しますと森林環境教育が 4 課題、民国連携の取組が 3 課題、目標達成に向けた活動が 4 課題だと考えております。

それぞれ森林・林業の大きな課題に取り組んでおられることに敬意を表します。また、色々な立場や世代の違う人と交流することは大変苦勞があったのではないかと思います。これからの業務に必ず役立つはず。引き続き連携・交流を広げてほしいと思います。

【中学・高等学校の部全般】

中学・高等学校の部については、高等学校から 3 課題の発表がありました。キノコの廃菌床の処理、漆文化の継承、それから儲かる林業といった課題に着目されたことに大変感服いたしました。周囲の人間生活に目を向けるということは高校生ではなかなかできないことではないかと思いますが、これは必要なことだとも思います。これからもその背景やこれからどのように進めばいいのかということを考えながらぜひ行動してほしいと思います。今後の活躍を大いに期待しております。

森林ふれあい・地域連携部門（個別）

東北森林管理局森林整備部長 牛尾 光

23 教室で出会う森林と林業～“非現地型”学習を通じた学びの創出～

森林環境教育で一般的に実施されている「現地型」の課題と学校側の要望に応えるための取組が発表された。授業の方法や資料作りに工夫がみられ、生徒から日常生活と森林との関わりを理解してもらえたことは大きな成果である。「現地型」が効果的と考えがちであるが、少しでも多くの小・中学生が森林・林業に興味や理解を得られるよう、これからも工夫を重ねて森林環境教育に取り組んでほしい。

24 民国連携による市町村森林整備支援について

市町村林務担当者の業務を支援するために県と国有林の職員が連携した研修会の取組が発表された。今回は「森林作業道」の設計に関する内容で、現地踏査を含めた実習を行っており大変有意義なものである。森林作業道の設計は森林施業を効率的に行う上で重要な業務であり、市町村林務担当者の技術力向上とともに、民国連携による森林整備も進んでいく相乗効果が期待できる。

25 県職員と連携した民有林支援の取組～上北地方林業振興協議会の森林・林業勉強会の実施を通して～

市町村林務担当者の業務を支援するために県と国有林の職員が連携した勉強会の取組が発表された。要望の多かった「ナラ枯れ被害対策」をメインテーマに国有林を活用して実習する効果的なものである。病虫害の拡大を防止するためには民国連携が必要不可欠であり、継続的に勉強会を開催することで、緊急時にはすぐ情報共有できる体制づくりも進めてほしい。

26 秋田県雄勝地域における森林経営管理制度の取組について

森林経営管理制度による森林の集約化を進めるうえで主体となる市町村林務担当者に対する支援の取組が発表された。県として人員体制、専門知識の不足、森林境界の不明確といった市町村の課題に対応した研修を実施することで、業務の省力化や効率化を進めている。この地域では国有林との連携も進んでおり、国有林のフィールドも活用しながら市町村林務担当者の技術力向上につなげてほしい。

27 南陽市秋葉山における森林火災後の二次遷移の実態

大規模な森林火災後の植生の変化を調査した結果が発表された。火災の強弱が二次遷移に影響すると考えられる中、土壌の状態を調査したことは興味深い。火災の影響はA層の上層まで受けているが、植生の状況から二次遷移が進んでいることが示唆されており、今

後の調査を継続することで近年多発している森林火災の復旧方法の指針となることを期待する。

28 木桶を通じた木づかい文化の発信

～「木桶プロジェクト」の活動～

木桶を木材利用の伝統文化として継承するための取組が発表された。醸造に必要な桶は現在ステンレスや珪瑯に変わっているが、木桶は微生物の発酵を助けて風味に深みを与えるなど機能性に優れており、醸造元や木材加工業者にも理解・協力を得られたことは大きな成果である。日本の食文化と合わせて、品質向上に向けて醸造と木材業界の連携が進むことを期待する。

29 今年は300人超！学童保育で森林教室

森林環境教育を多くの子供たちに広げるための学童保育で行った森林教室の取組が発表された。学童保育は、子供たちの興味に合わせて設定できたり窓口が委託業者になるため打合せの負担が少ないなど開催する側もメリットが多く、また参加した児童数も増加していることは大きな成果である。森林環境教育の目的と子供たちの興味が一致するよう分析を継続して普及拡大につなげてほしい。

30 葉っぱと樹皮で樹木神経衰弱「Makki（マッキ）」の取組について

業務に必要な樹種識別スキルを向上するためにゲーム性のある教材を開発した取組が発表された。樹種識別は一般的に詳しい人に習うのが最良と考えるが、ゲーム性のあるカードを考案したのは若手職員が多い職場環境を反映してのことであろう。おそらくカードを作成している時が一番学習できる時間であるので、定期的に改良したり個人でも作成してみることをお勧めする。

31 採材現地検討会の新たな標準モデル構築の取組～新しい検討会構築時のプロセスの提示～

実情に応じた参加者にも役立つ採材現地検討会構築の取組が発表された。実際の素材生産現場は針葉樹がほとんどで高性能林業機械による採材が一般化しているため、実際の事業実行に役立てるという観点から企画を練り直している。対象者と意見交換したことや、チーム体制によりそれぞれが役割を持ち意見を出し合えるようになったことが大きな成果である。

32 岩手県雫石町志戸前川地区直轄地すべり防止事業等と管内教育機関との連携による森林環境教育の取組についての考察

山地災害防止事業を主旨とした森林環境教育の取組が発表された。高等教育機関（大学・高校）に対する森林環境教育は就職や進路を考える場ともなるため、実際の工事現場を見学することは学生にとって非常に有意義だと考える。国有林の業務とその必要性・重要性を理解してもらうのにも有効であり、多くの学生が我々の業務に関心を持ち引き継いでくれることを期待する。

33 市町村と連携したウルシ活用による再造林推進の取組

再造林率向上を目的としたウルシ林造成の技術普及の取組が発表された。再造林が進まない理由である経費負担や担い手不足を解決するため、ウルシ林施業の特徴である早い初期成長、短伐期、萌芽更新可能に着目したことは興味深い。平成 30 年度からの取組で苗木生産者の増加や民間主体への広がりなど成果をあげており、地域の森林所有者の経営意欲が向上し一大生産地になることを期待する。

中学・高等学校の部（個別）

東北森林管理局森林整備部長 牛尾 光

34 「育てる」と「燃やす」のハイブリッド～廃菌床の全量資源化を目指した、私たちの完全リサイクル計画 EPISOD 1～

キノコ栽培の廃菌床を木質バイオマス資源として開発する取組が発表された。廃菌床を固める「つなぎ材」として古紙に着目し、十分な強度と燃焼時間が得られる最適な配合比率を発見したことは評価できる。廃菌床も古紙もゴミとなっていたものがエネルギーへと変わったことは地域課題にも貢献するものであり、次は実用化に向けた更なる検証に期待する。

35 国産うるしの増産と林福連携

令和3年度から参加しているウルシの植栽事業と高大連携事業の取組が発表された。「国産ウルシの増産と林福連携」をテーマに播種から植栽・下刈を経験し、国産ウルシの現状と担い手不足などの課題を学習している。今後も地域林業を学ぶ高等学校として課題解決に取り組み、活動が継続されるよう後輩にもしっかりと伝えていってほしい。

36 山は宝の山～未利用資源を活用した自伐型林業の可能性～

あまり利用されていない広葉樹資源を活用する取組が発表された。資源量調査から収支計算、薪・炭の生産・販売、スギとの比較など林業経営の基本を学習し実践していることは評価できる。身近にある資源を有効に活用し生活の手段にすることは大事なことであり、今後も需要や付加価値など常にビジネスとしての可能性を考えることを忘れないでほしい。

令和7年度 森林・林業技術交流発表会 審査結果

賞 区 分		番号	発表課題名	所属	職名	発表者
東 北 森 林 管 理 局 長 賞	一般の部 森林技術部門	最優秀賞	2 ドローンによる新たな造林地管理手法の提案 ～高精度GNSSとAIの活用～	岩手南部森林管理署	主事 森林情報管理官	田中 慈 中村 優介 佐藤 嶺花
		優秀賞	3 ドローンを使用した下刈の要否判定について	山形森林管理署	主事	河野 智紀
			13 スマートフォンによる衛星通信緊急連絡検証	米代東部森林管理署上小阿仁支署	主事	池元 大知
		奨励賞	4 海岸防災林における松くい虫被害調査の省力化に向けて ～ドローンを活用した調査方法の検討～	宮城県東部地方振興事務所	技術主幹	粕谷 玲子
			7 署内の仕事、見える化してみた！	宮城北部森林管理署	主事 森林整備官	吉澤 皓大朗 佐々木 尚
	一般の部 森林ふれあい・地域 連携部門	最優秀賞	30 葉っぱと樹皮で樹木神経衰弱「M a k k i (マッキ)」の取組につ いて	米代東部森林管理署	治山技術官 主事	吉田 小春 成田 拓矢
		優秀賞	29 今年は300人超！学童保育で森林教室	下北森林管理署	地域技術官 森林整備官	松田 悠吏 中塔 花梨
			33 市町村と連携したウルシ活用による再造林推進の取組	青森県中南農林水産事務所	技師	坪 奈津美
		奨励賞	23 教室で出会う森林と林業 ～“非現地型”学習を通じた学びの創出～	三陸中部森林管理署 技術普及課	主事 技術普及課係長	檜山 紗希 大日向 知
	28 木桶を通じた木づかい文化の発信 ～「木桶プロジェクト」の活動～		宮城県仙台地方振興事務所	技術主幹（班長）	河部 恭子	
	一般の部 森林保全部門	最優秀賞	21 抵抗性クロマツ林の成立にともなう加害甲虫類の変化 （予備調査編）	庄内森林管理署 朝日庄内森林生態系保全センター	主事森林官	大類 瑞穂 林 裕貴
		優秀賞	22 秋田県海岸林における広葉樹植栽木への被害に周囲の樹木 の種類と密度が与える影響	秋田県立大学	秋田県立大教授 横浜国立大助教	寺田 涼音 星崎 和彦 坂田 ゆず
		奨励賞	18 三陸中部森林管理署の造林地におけるニホンジカ被害対策 について	三陸中部森林管理署	森林官	荒川 いずみ
	一般の部 中学・高等学校の部	優秀賞	34 「育てる」と「燃やす」のハイブリッド ～廃菌床の全量資源化を目指した、私たちの完全リサイクル計画 E P I S O D E 1～	山形県立新庄神室産業高等学校 食料生産科		齊藤 千尋 加藤 悠大 下山 空駕 柴崎 優思
		奨励賞	35 国産うるしの増産と林福連携	青森県立五所川原農林高等学校 森林科学科		新木 駿ノ介 楠引 悠惟 能登谷 倅明
奨励賞		36 山は宝の山～未利用資源を活用した自伐型林業の可能性～	秋田県立秋田北鷹高等学校 緑地環境科		三浦 悠人 佐藤 壮悟 米澤 鷹介 畠山 諒 簾内 大凱斗	
日本森林技術協会理事長賞		8	林道調査はスマートフォンとともに ～手のひらサイズで現地がわかる！～	東北森林管理局林道技術者育成PT 由利森林管理署	由利署地域技術官 盛岡署森林整備官	高橋 凌 藤野 大河
日本森林林業振興会会長賞		32	岩手県栗石町志戸前川地区直轄地すべり防止事業等と管内 教育機関との連携による森林環境教育の取組についての考察	盛岡森林管理署	治山技術官 主事	小酒 直之 菊地 澤
東北森林管理局林政記者クラブ賞		27	南陽市秋葉山における森林火災後の二次遷移の実態	東北農林専門職大学附属農林大学校 林業経営 学科		河原 直希